



100歳になられた宮崎雄二さん

「東京の友松会で活躍した宮崎雄二さんに話を聞くと良いよ。」と織茂領

先生に教えられたのは、今からもう二年も前のことです。それ以来、気にはかかっていたのですが、他の事にまぎれて宮崎さんに話を聞くのをつい怠っていました。

11月にはいつ織茂先生から連絡があり、昔の「茅ヶ崎八景」を描いた宮崎さんの絵の展示会が都筑区役所であるので、その時に宮崎さんに紹介してあげようとのことでした。そこで11月15日に都筑区役所で宮崎雄二さんに初めてお目にかかり、東京友松会のことを話して頂くことになりました。そして12月5日に都筑区荏田の宮崎さんのお宅に伺い、いろいろな資料を拝見しながら東京友松会の話や昔の師範学校の話をお伺いしました。以下がその時に伺った話です。

わが師範時代と東京友松会のこと

語り手 宮崎雄二（昭和9年-1934 神師卒）
聞き手 黒川鈴谷（昭和35年-1960 国大卒）

黒川 今年も師走に入ってなんとなく慌ただしさの感じられる頃となりました。本日は先生の御自宅まで押し掛けまして申し訳ございません。先生は100歳になられたとのことで、おめでとうございます。お話を伺うのがあまり長時間になってお疲れにならないように気を付けます。今日は昔の師範時代の思い出と、東京友松会のこととを伺いたいのですが、まず先生がお生まれになった当時のこの辺りの様子をお聞きしましょうか。

宮崎 私が生まれた場所は神奈川県都筑郡中川村です。いま横浜市都筑区となっているこの場所は、夏には蛍が飛び交い、秋には禅寺丸という甘柿が鈴なりになる純農村でした。私の生家は農家で、今は地下鉄のセンター南駅がある辺りに在りました。生家の在った辺りは小字で「茅ヶ崎」という地名でした。

黒川 先日、都筑区役所のホールに展示された先生の「茅ヶ崎八景」の絵は、今では現代的な街になっている、駅や区役所周辺の昔の風景を描かれたものなのですね。

宮崎 昔この辺りの景色を近江八景になぞらえて、茅ヶ崎八景というのがありました。あの絵は子どもの頃のこの八景を思い出して、描いたものです。これらの名勝地も港北ニュータウンの中に飲み込まれ、今は跡形もないのは寂しいことです。



当時の中川村茅ヶ崎の絵図(宮崎雄二氏制作)

黒川 小学校は中川小でしたか。

宮崎 そうです。中川尋常高等小学校です。以前この対談に登場された大久保正治先生は中川小での私の先輩です。友松会元会長の織茂 領さんはやはり中川小で、私の弟と同級でした。



茅ヶ崎八景のうち「谷の中の雁」



茅ヶ崎八景のうち「城山の秋の月」

(宮崎雄二氏 画)

黒川 師範に入学されたのはいつなのですか。

宮崎 神奈川師範には、大久保先生が昭和4年3月に卒業されるのと入れ替わりに私が4月に入学しました。卒業したのは昭和9年3月です。

黒川 卒業された昭和9年は私の生まれた年ですから、先生は私の父親よりいくらか若いお年頃ですね。そう言えば私のいる磯子支部の会員で、昨年4月に99歳目前で亡くなられた桐生 一さんとは師範の同級生だそうですね。

宮崎 そうです。桐生さんのことは良く覚えていますよ。ユニークでおもしろい人でした。在学中に病気になって、卒業は1年遅れたようですが。

黒川 桐生さんに聞いた所では5年生の時に肋膜炎で入院したのですが、入院中に教育実習が終わってしまい、実習をしていないので皆と一緒に卒業出来なかったとのこと。つまり留年した訳ですが、次の年の1学期に実習が済んだら「君は他の勉強は去年ちゃんとやってあるから、もう卒業してよい」との学校当局の温情で7月に卒業したそうです。

話は一挙に卒業までとんでしまいましたが、もう一度

入学の頃に話を戻します。入学試験は何処で何日間くらいやったのですか。

宮崎 入試は鎌倉の校舎で三日間くらいやりました。でも詳しいことはもう覚えていません。

黒川 私達が昭和31年に国大に入った時に入学式があったかどうか、同級生に聞くのですが皆良く覚えていません。先生の時には入学式がありましたか。

宮崎 入学式は雨天体操場でやりました。入学者の代表で秋山 利さんが挨拶しました。

黒川 入学者は何名くらいいましたか。

宮崎 1部は甲組・乙組それぞれ40名、合計80名でした。このうち今いるのは残念ながら私一人です。2部の方の在籍人数はわかりません。

黒川 先生が師範に進まれたのはどのような理由からですか。

宮崎 中川小学校の担任の先生の影響もあったと思います。しかし一番大きな理由は、当時は不景気の絶頂で働き口がなく、「大学は出たけれど・・・」という時代なので、師範を卒業すれば確実にどこかの小学校の先生に成れるというのも魅力でした。

黒川 そういうことも大きな理由となるのでしょうか。ところで師範生活の最大の特徴は全寮制だったと思います。寄宿舎の各部屋の人数や学年の構成はどの様でしたか。



師範時代の宮崎雄二さん

宮崎 寄宿舎は1部屋に7,8人入りました。5,4,3,2,1の各学年と2部生の混合で、5年生が室長になりました。寮には舎監の先生が何人か居られ、朝夕に全員が廊下に並んで舎監の当直の先生と生徒の寮長による点呼がありました。点呼後はもう校外に出てはいけないのですが、ひそかに校外に抜け出す者もいて、それを「脱柵(だっさく)」と言いました。

黒川 それは規則違反だから、見つければ罰を喰らうのでしょうか。

宮崎 もちろん厳しく叱られます。

黒川 脱柵して学校の外に抜け出して、何をしたのでしょうか。

宮崎 さあ、私はやったことが無いので分かりません。

黒川 桐生さんなど、きっと常習犯だったのではないかな。元気なうちに聞いておけば良かったです。寄宿舎の生活で楽しかったことは何ですか。

宮崎 楽しかったことは、室会や郡会、誕生会などの集まりです。

黒川 郡会の「郡」というのは都筑郡とか三浦郡とかいう地域を指す言葉ですか。

宮崎 そうです。同じ郡の出身者が集まりました。室会は月に一度くらい各室で、誕生会も月に一度食堂でやりました。

歌を歌う者もあり話をするものもあり、何かを食べたりしてとても楽しかったです。そう言う会ときには学校の傍のお店から菓子や果物など出前してもらったりしました。

黒川 これも桐生さんから聞いた話なのですが、師範は授業料や食費・寮費などがかからないといっても、衣服代や学用品費、小遣いなどは必要だったとのことですが、そう言う会にもお金がかかったのでしょうか。

宮崎 もちろん会費が必要でした。その他にも小遣いが必要なことがありました。例えば、決まった日に校内でラーメン屋が店を出したのですが、美味しいので私もよく食べに行きました。若いから腹も減るしね。だから小遣いはどうしても必要でした。私の場合は每学期休暇のあと学校に戻る時に50~60円くらい小遣いを貰いました。当時は昭和の初めの不況の時代だったし、兄弟が10人もいたのでお金を貰う時には親に申し訳ないと思いました。

黒川 50~60円と言っても、今とお金の価値が全然違いますからね。小学校の先生の初任給が当時はせいぜい50円くらいでしょう。

宮崎 なにしるラーメンが1杯10銭(1円の1/10)の時代ですからね。まあ、私の家はかなり大きな百姓だったので出してくれたのでしょうか。師範は給費制度と言っても、農家であればある程度の農地を持つ家でなければ進学させるのは無理だったと思います。

黒川 当時中川村の先生のお宅から一番近い鉄道の駅は何処でしたか。今の地下鉄とか田園都市線ど無かったですでしょう。

宮崎 家から一番近い駅は横浜線の小机駅でした。駅までは茅ヶ崎から東方・折本・川向などの集落を抜け、山や田畑の間の道を通って二里(約8km)ほどありました。もちろん今のようにバスなど走っていませんから、歩くのです。



寄宿舎での夜の点呼



裏山より見下ろした、寄宿舎全景

黒川 二里歩いて小机駅から横浜線に乗り横浜に出て、そこから横須賀線で鎌倉まで行くのでは
はずいぶん大変ですね。師範では週末には実家に帰っても良いのだとも聞きましたが、
この経路では時間がかかってちょっと大変ですね。

宮崎 ですから私は実家に帰るのは年に三度、学期末だけでした。実家が湘南方面とか三浦半島
とか鎌倉から近い場所の人は、土曜日に帰る人も有ったようです。ですから新入生の頃は、
夜寝ていると淋しくて家に帰りたくて布団の中で泣いてしまいました。



ラーメンの校内出張販売。ラーメン 10 銭、ワ
ンタンメン 20 銭。

黒川 桐生 一さんに聞いた所では、師範学校と言うのは
完全な男社会で、先生方はもちろん事務の人から
炊事賄いの人まで全て男性だったと言うこと
です。でも桐生さんから頂いた師範の卒業ア
ルバムの末尾に載っている附属職員住所の中
に、「三浦富美子」という名があります。すると
附属小に一人だけ女性の先生がいたのでは
しょうか。

宮崎 師範は男社会なのは、桐生君の言う通り
です。その中で附属の三浦富美子先生は貴重
な存在でした。

黒川 師範学校に限らず、昔の学校には制服
がありました。その場合、登校時には制服で
自宅では私服だったと思います。ただ師範
学校はほとんど 24 時間全校生徒が一緒
に生活するので、常に制服だったのか或

いは時により違ったのかどうなのでしょう。

宮崎 授業や校外に外出する時、或いは点呼
や食事の時には制服でした。就寝時などく
つろぐ時はもちろん私服(着物)でした。

黒川 その頃の師範の学校行事には、どん
なものがありましたか。師範出身の先輩に聞
いた話では、藤沢マラソン(通称 藤マラ)
とか由比ガ浜での遠泳とかがあったそう
ですが。

宮崎 そういう行事は、私達の時にもあり
ました。師範では全員が運動部に入らな
ければならなかったので私は弓道部に
入りました。でも弓はあまり上手には
ありませんでした。

黒川 川崎の堀内先生(昭和 3 年卒)や都
筑区の大久保先生(昭和 4 年卒)の時は
は、師範の構内にある附属小学校の他に
片瀬に第二附属の正修小学校があり、堀
内先生はその正修小学校で教育実習を
されたそうです。先生はどの学校で実
習をされましたか。

宮崎 私は附属小学校の 4 年生の女子
組で実習しました。期間ははっきり覚え
ていませんが、1 学期間くらいだった
と思います。

黒川 在学中に何かお困りになったこと
などはありますか。

宮崎 寄宿舎で皮膚病が流行って困った
ことがあります。湿疹ができて痒くてた
まらないのですが、良い薬がありません。
仕方がないので患部にヨーチンを塗る
のですが、これが飛び上るほど痛い。そ
こでヨーチンを塗ったあと他の人に患部
を団扇であおいで貰いました。あれは
苦しかったです。



師範弓道部の写真。前列左から二人目が宮崎さん

黒川 いよいよ卒業されるわけですが、当時は初任校に赴任する前に「短期現役兵」という関門がありましたね。先生はどの連隊に行かれたのですか。

宮崎 私は同級生と一緒に、今の北の丸公園にあった近衛歩兵第一連隊に入隊しました。当時の中隊長は岡田大尉、連隊長は小泉恭次大佐で今でも名前を覚えています。

黒川 当時の軍隊では、直属上官の官姓名を言えないと大変でしたからね。師範から来た短期現役兵は、その人達だけで集まって内務班を作っていたのですか。

宮崎 そうです。私たちだけで纏まっていた。

黒川 それは良かったですね。藤沢の須田直吉さん(昭和17年卒)は戦争中に海軍に徴集され、駆逐艦に乗って戦った人ですが、師範出身者は進級が早く3カ月ごとに進級して1年で下士官になってしまうので、古い兵隊に睨まれてだいぶ尻にバッテリーを喰らったそうですよ。で、8月末に除隊されて小学校に赴任されたのですね。初任校はどこでしたか。



近衛歩兵第一連隊で

宮崎 9月から都筑郡中里村の山下小という小さな学校に赴任しました。それから3年たって井戸ヶ谷尋常高等小学校に異動し、昭和16年に東京の神田芳林小に転任しました。

黒川 そうですか。ではその東京に転任された時から「東京友松会」との縁が出来た訳ですね。それでは東京友松会のことを伺うことにしましょうか。



戦時中の学童疎開の児童の様子
埼玉県栗橋の寺で。宮崎雄二氏画

宮崎 東京在住友松会有志の会は、明治時代から有ったようです。ただ古い時代のことはよく分かりません。組織的な会を作ろうとした最初の動きは、昭和25年(1950)11月4日の会合です。新倉文郎(大正2年卒)、近藤音二郎(大正12年卒)、相沢義雄(大正13年卒)などの方々の呼びかけで、銀座の日本自動車会館の三階で22名が出席して設立総会がもたれました。しかし間もなく新倉会長・近藤副会長が相次いで逝去され、この会は実質的には解散状態になりました。

黒川 すると現在の東京友松会に繋がる活動は、いつごろから始まったのですか。

宮崎 昭和25年の第1回の動きにも参画した相沢義雄氏が中心になって、昭和36年7月に相沢氏が院長をしていた成増病院で、発起人委員会がもたれました。

黒川 院長をしていたと言うと、相沢義雄さんは大正13年に師範学校を卒業後に、医学の勉強をして医師になったのですか。

宮崎 そうなのです。東京友松会には教育関係者だけでなく他の分野に進んだ人もたくさんいました。ちょうどその頃に自治大臣になった篠田弘作氏(大正9年卒)も他の分野に進んだ一人です。篠田氏の大臣就任がきっかけとなって東京友松会の結成は急進展し、昭和37年9月10日に椿山荘で第1回の総会を開き、初代会長に花井重次氏(大正8年卒)が就任し、

会則や役員を決めました。

黒川 先生からお借りした「東京友松の集い」という会報の綴り込みを拝見すると、昭和61年1月1日に発行された会報「東京友松の集い」第1号から今年(平成26年)の第80号まで、毎年3~4回ずつ定期的に発行されています。これはすごいことですね。

宮崎 この会報第1号は私が編集担当で、謄写版で印刷したものです。

黒川 そうですね。あの頃はまだ謄写版を使っていましたね。会報の第2号(昭和62.11.1)を見ると、この頃宮崎先生は東京友松会の副会長で、同時に友松会の東京支部長をなさっていますね。



校長としての最後の任地 瑞穂第一小で

宮崎 そうです。私もこの頃は元気に頑張っていました。

黒川 この会報の発行の様子を見ても、東京友松会の組織はかなりしっかり出来ていると思いますが、会報の発行はどんな部署でやったのですか。またその他にはどんな活動をする組織がありましたか。

宮崎 時代によって少しずつ変化はありますが、基本的には5人くらいで構成される編集委員会が会報の作成にあたりました。組織的には編

集委員会が各部に入っていた時もあり、各部とは別に独立していた時もあります。

黒川 その「各部」というのはどんなものがありましたか。

宮崎 これも時期によっていろいろ変化しています。平成14年9月8日発行の会報38号を見ると、会員部・企画運営部・財務部・教養部などがあり、各部は担当の副会長1名と数名の部員とで運営します。この時には会報発行は会員部が担当していますね。だから編集委員会は会員部内の組織です。

黒川 教養部とは、どんなことをするのですか。

宮崎 会員相互の親睦をはかる「おしゃべり会」や「見学会」「旅行会」などを企画実施します。先ほども述べたように組織は時代によって変化しています。現在の組織になったのは平成25年度の東京友松会総会で決定された会則によるもので、それによると各部は総務部と教養部の二つになり、会報発行は総務部でやることになっています。総務部の中に編集委員会がある形ですね。

黒川 その25年の改定でちょっと不思議に思うのは、「財務部」が無くなって、「会計・会費徴収・送金等の事務は総務部が担当する」となっていることですね。財務というのはとても大変な面倒な仕事なので、財務部があった方が良いでしょうと思うのですが。

宮崎 私も今は東京友松会の運営にはタッチしていないのでその間の事情はわかりません。でも推測してみると、昔のように役員の数を揃えることが難しくなったために、やむを得ずそうしたのではないのでしょうか。会報の発行も、年4回から3回になりましたしね。

黒川 役員の数を揃えることが難しくなったとは、どういうことなのですか。

宮崎 端的に言えば、会員数が減ったと言うことです。東京友松会を再建した頃には、会員数は

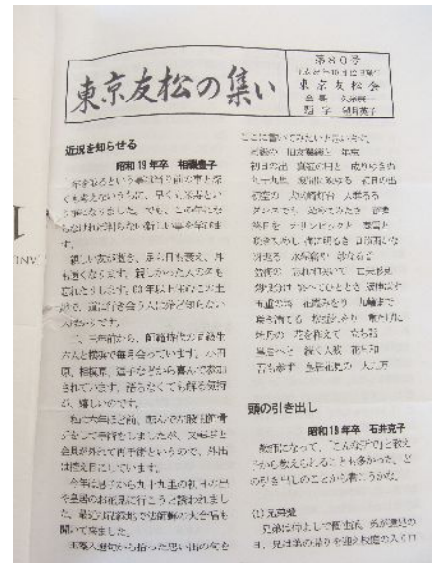


東京友松会会報の分厚い
閉じ込み

200人を超えていました。それが今は56人で、1/4になってしまいました。会員の高齢化も進み物故者もあり、一方で新しい会員の入会はほとんど無いと言うことです。

黒川 なるほど、友松会全体が直面しているのと同じ問題に、東京友松会もやはり直面しているのですね。会員の減少の問題はどうしたら良いのか絶望的になりますが、ここでちょっと視点を変えて別の事をお聞きしたいと思います。

実は先生にお話を伺うまでは、東京友松会については、私は何も知りませんでした。なにしろ母校の所在地は神奈川県で、そこから離れた東京ですから会員数も少ないだろうし、年に一度の懇親会を兼ねた総会で親睦を深める程度の活動だろうな、と思っていました。ところが先生のお話を伺い、会報などの資料を拝見して吃驚しました。吃驚すると同時に不思議に思ったのは、なぜこんなに活発な活動が出来たのだろうかということです。何故なのでしょう。私達の故郷は母校のあった、または現にある鎌倉や横浜です。あるいはもう少し広く神奈川県です。東京は異郷の地だと思うのですが。



東京友松会会報 第80号(H.26.10.12)

宮崎 異郷の地にあるからこそ、故郷が懐かしいのです。ほら、室生犀星の詩にも「ふるさとは遠きにありて想うもの」とあるではありませんか。もっとも東京と神奈川ではそんなに遠くはありませんがね。こんな情緒的な言い方で無く、もっときわめて現実的に言うならば、神奈川県内にいた時には周囲に同窓生がたくさんいますから、同窓であることは当たり前であって特に意識しませんでした。ところが東京の学校に転任したら違うのですね。私が

東京に転任した昭和16年当時、東京には青山・豊島・大泉と三つの師範学校があり、これら三校の出身者に比べて私のような神奈川師範の出身者は給料の面で差別されました。東京の師範の出身者の給料は、当時の金額で私よりも月に十何円か多いのです。これには癪にさわって、私は大学の夜間部に通って資格をとり、給料の是正をして貰いました。そういう状況ですから、東京にいる数少ない同窓生は互いに助け合おうという空気があったのです。



朝会でにこやかに話をする宮崎さん

黒川 なるほど出身校によって給料の額が違うなどというのは、今では考えられませんね。そう言うことは経験した方に聞かないと分かりません。

宮崎 それから会報が毎年何回か、延々と80号まで出されているのも、広い都内に散らばっている会員と連絡を取るには、それしか方法が無いからなのです。

黒川 確かに仲間が同じ職場や近くの学校にいる訳ではありませんからね。

宮崎 もう一つの東京の特殊な事情としては、教育の世界以外に進んだ優れた同窓生が多かったことです。昭和25年の設立総会のところで触れましたが、大和自動車会社社長の新倉文郎氏・銀座の近藤書店主 近藤音二郎氏・成増病院院長 相沢義雄氏・政治家 篠田耕作氏な

どいろいろユニークな方が居られました。

その他に、師範を卒業してから高等師範・文理科大(現在の筑波大)などのコースで学問の道に進まれた方も何人も居られます。そういう方々の人間的な影響もあったと思います。

例えば東京学芸大や日本女子体育短大などで女子体育の振興に尽くされた中島 花先生(大正 9 年卒)、東京友松会の初代会長で高等師範の校長代行を務められた花井重次先生(大正 8 年卒)、お茶の水女子大栄養学主任教授として活躍された松元文子先生(大正 13 年卒)、東京友松会の二代会長で立正大学教授の小川一朗先生(昭和 13 年卒)、若手では早稲田大学に奉職され日本古生物学会の会長をなさった平野弘道さん(昭和 43 年卒)など多士済々です。

黒川 良く分かりました。東京の会員方々はマイナスの要因をプラスに転化して活動してこられたと同時に、東京が日本の中心であるプラスの面も活用されてきたのですね。お話を伺ってとても参考になりました。

本日は先生の体調の事も考えずに、長時間お話を伺いまして申し訳ございません。それではこれで終わらせていただきます。ありがとうございました。(H.26.12.5)



百歳を迎えたお祝いの花束

茅ヶ崎八景のうちの六景 宮崎雄二氏画



清水の夕照



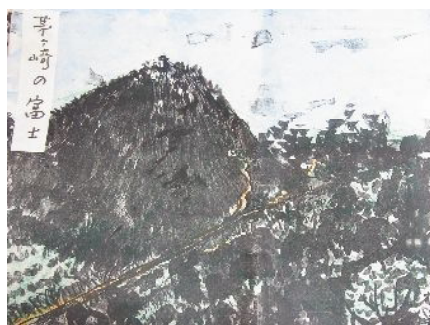
四五六峠の夜の雨



境田の暮雪



谷の中のホタル



茅ヶ崎の富士



飯塚の墓(正庵塚)